

古墳からみた栄山江流域・百済と倭

The Yeongsan River Basin, Baekje and Wa, from the Perspective of the Kofun

金 洛 中

KIM Nakjung

はじめに

①百済地域の倭系古墳

②栄山江流域勢力・百済と倭の交流相

【論文要旨】

本稿では、栄山江流域勢力および百済と倭の関係について、倭系文物や古墳を主な分析対象として検討を行った。

百済地域に遺された倭系文物は、都城よりも栄山江流域など特定地域に偏重している。また、栄山江流域と共通的な墓制や栄山江流域系の文物が副葬された、九州地域の七夕池古墳、梅林古墳、番塚古墳、正籠3号墳などの存在が注目される。このことは、百済―倭の双方交渉の実務的な役割を、地理的に近い栄山江流域と九州地域勢力が主導的に担ったために現出した現象であると考えられる。すなわち、百済と倭の交渉・交流における中心軸はそれぞれの王権であったけれども、地域勢力の参入と百済王権の関与の程度は地域により多様であったと考えられる。

栄山江流域における倭系文物には、武装に関連するものが多い。代表的な例は、帯金式甲冑や各種の武器などである。その一方で、日本列島における百済・栄山江流域系の文物は、オンドルなどの住居施設や炊事用土器などをはじめ、渡来集団が移住・定着したことを示すものが多い。このような非対称性は、高句麗との緊張関係にあった百済王権が倭の軍事的支援を必要とした状況や、倭人たちが百済に進出し活動した理由が移住・定着ではなく、比較的短い期間に終えることができる活動（例えば軍事支援）などであったことを示している。

【キーワード】 栄山江流域と九州、前方後円形古墳、横穴墓、倭系文物、移住・定着

はじめに

近肖古王代から滅亡するまで、百済は他のどの国よりも倭と密接な関係を保っていた。このことを裏付けるように、5～6世紀の倭系文物が百済地域に多く見られる。ただし、それは栄山江流域に偏重する様相を見せている。従って、考古資料から百済と倭の交流相を解釈する際には慎重を期する必要があると説かれることもある。

本稿では、最終的に百済の領域となる地域に現れる倭系文物や古墳を取り上げ、栄山江流域勢力および百済と倭の関係について検討したい。対象となる古墳には倭系の竪穴式石槨、横口式石室、横穴式石室、前方後円形古墳、そして横穴墓がある。これらの倭系古墳や副葬品の現状での理解をもとに、その出現背景、倭との交流における百済王権と地域勢力の役割などについて考察する。

①……………百済地域の倭系古墳

1. 倭系古墳の出現

倭の墓制の影響で百済地域に築造された古墳には竪穴式石槨、横口式石室、九州系横穴式石室、前方後円形古墳そして横穴墓がある。

これら倭系古墳のうち、これまで注目されてきたのは栄山江流域の九州系横穴式石室と前方後円形古墳である。ところが、近年にはそれより早い時期の倭系古墳が築造されていたことが明らかになってきた。5世紀前・中葉に築造された倭系古墳として、高興雁洞・野幕古墳、海南外島・新月里古墳、新安ペノルリ古墳群、天安道林里古墳などが挙げられる。主に南海岸に分布するが、天安道林里古墳のように中部西海岸でも確認されている。羅州佳興里新興古墳のように栄山江を伝って内陸に進出しているものもある。埋葬施設は竪穴式石槨墓が主流をなすが、霊岩沃野里方台形古墳のような横口式石室もある（図1）。

これらの古墳は現地において系譜が追えない外来のものであり、5世紀前・中葉に北部九州から流入した多様な墓制、すなわち石棺系竪穴式石室、箱式石棺および竪穴系横口式石室に関連するものである。全体の構造もさることながら、盛土しながら墓壙を造成している点（構築墓壙）、葺石や石槨と墓壙の間の裏込めなどの墳丘施設、石槨の平面が梯形である点（九州の石室に見られる「羽子板形」の平面）、壁面に朱を塗布する点、壁面の石材の隙間に鉄器を納める点などが直接・間接に伝わった倭系要素である。

野幕古墳のように北部九州の石棺系竪穴式石室（例えば福岡県の七夕池古墳）とほぼ同じものがまず築造されるが、5世紀中葉以降には在地的な要素が増す。すなわち、様々な種類の埋葬施設が複数備わった多葬墓（霊岩沃野里チャンドン1号墳、務安シンギ古墳）や、埋葬儀礼に関連して墓室内に土器が副葬される例（海南新月里古墳、務安シンギ古墳）、栄山江流域の専用甕棺墓に見られる棺外土器副葬（海南新月里古墳、霊岩沃野里チャンドン1号墳）などが確認されるのである。

これら導入期の倭系古墳の中では、沿岸航路の利用に直接関連する場所に位置する最も倭的な要

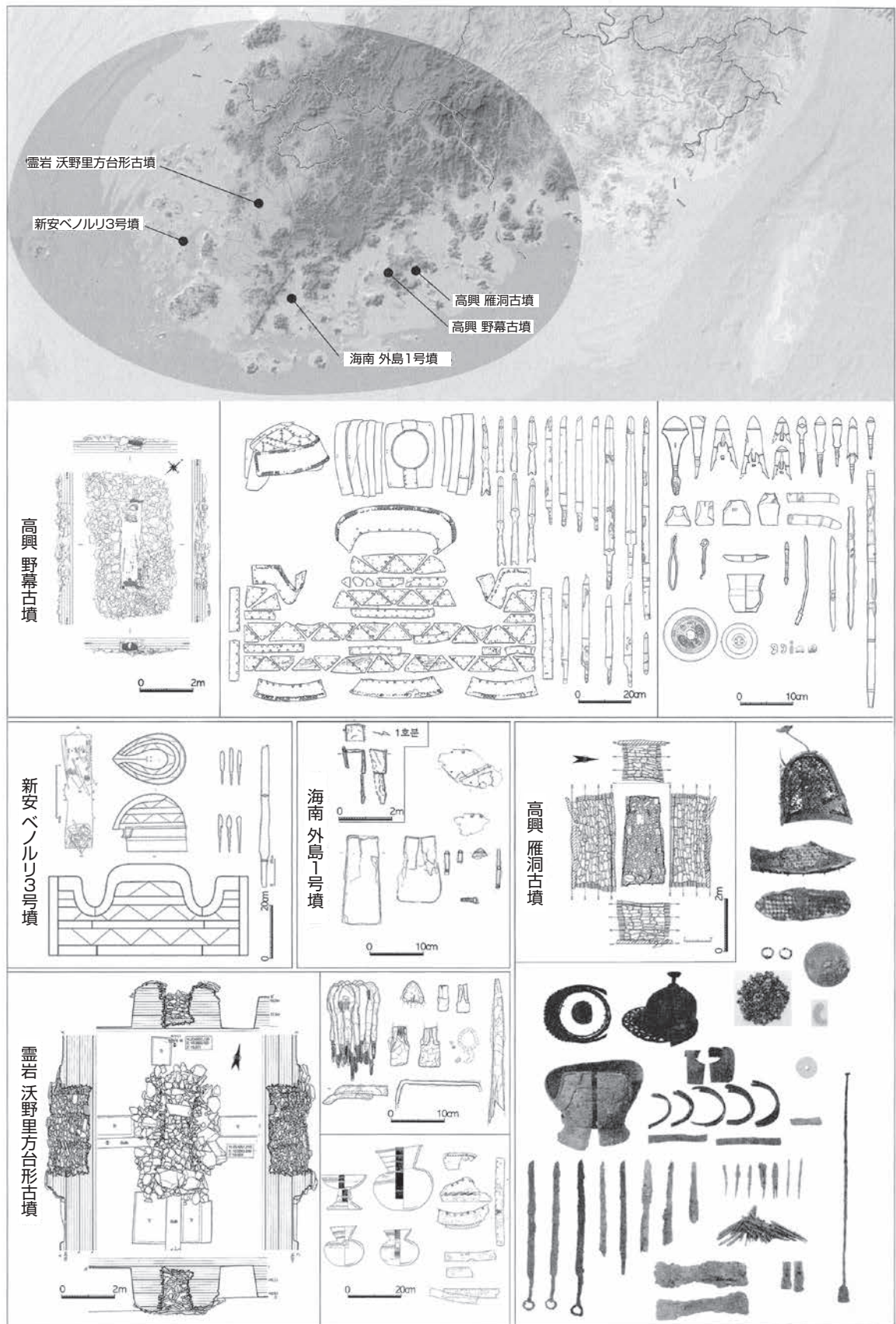


図1 5世紀の西南海岸地域における倭系甲冑出土古墳

素を備えた古墳がまず築造されたとみられる。高興野幕古墳、海南外島古墳、新安佐佐島ペノルリ古墳などがその例である。今後も、交通の要衝にあたる同様の立地の場所で類似した古墳が確認される可能性が高い。これらの古墳はもともとその基盤がなかった場所に単独で造営されており、当初から最上位級の威信財が副葬された。海岸の独立した場所に築造されたこれらの古墳には主に武器類が副葬されており、土器が1点も副葬されていない点が注目される。これは当時の韓半島で土器類を用いた埋葬施設内の喪葬儀礼が流行していたこととの大きな違いである。葬制が被葬者の出自を反映する要素であるとするならば、これらの古墳に埋葬された人物は倭人である可能性が高いといえる。

次に、これらの古墳の被葬者と直接・間接に関連する在地首長の古墳が高塚化（訳注：墳丘の高大化）する。外島古墳と対になる海南新月里古墳など北日面一帯の古墳群や、百済から入手した金銅冠や金銅飾履が副葬されていた高興雁洞古墳がこれにあたる。

また、南海岸地域のこのような動向に影響を受け、既存の在地集団も倭系埋葬施設の特徴を備えた古墳を築造しはじめる。その中には高塚化したものもあるが、その代表に霊岩沃野里古墳群からやや離れた別の丘陵に立地する方台形高塚のチャンドン古墳がある。これらの古墳もすべて海岸沿いに占地している点において先に挙げた古墳と同様である。ただし、チャンドン古墳は内陸に通じる栄山江河口の内海に位置しており、沿岸航路の寄港地とは性格がやや異なる立地である。

これらの倭系古墳が西・南海岸地域に出現した背景には、百済と倭の公式の通交の成立や、洛東江河口の金官加耶を中心とする交易体系の瓦解を想定することができよう。楽浪・帯方郡の消滅以降、百済と高句麗が直接国境を接するようになり、軍事的緊張と衝突が増した。このような状況において、4世紀中葉の近肖古王代に百済と倭は交渉を始めたのである。4世紀後半から5世紀初めにかけての高句麗の南進による不安定な情勢において、倭の勢力は百済の要請によって先進文物の供与を条件に韓半島に本格的に進出し、百済王権と交渉・交流したり軍事支援活動を行うようになったと考えられる。このような活動の過程において倭の勢力が海上ルートの主要地点にあたる地域を重視したのは明らかである。一方、5世紀中葉以降、従前の洛東江河口地域—玄海灘沿岸を中心とする韓・倭交易ルートが衰退し、西部慶南海岸の加耶および全南地域と筑後川流域を含む有明海沿岸の勢力が韓・倭交易の中心的な役割を担うようになる。このような変化の背景には、新羅の洛東江流域進出、倭国における九州勢力（筑後・肥後勢力）の伸張、倭・百済交渉の活発化などがあったことが指摘されている〔白石2003〕。

当時は、丸木舟の側面に別途側板を取り付けることで内部空間を確保し、かつ船体全体を補強した準構造船を利用して沿岸航海を行っていた。その際に潮流、岩礁、浅瀬、海流の速い場所、そして海岸や島の港に対する正確な情報が何よりも重要であったと思われる。また、物資の補給や艀を漕ぐ船員が休息するための中間寄港は必須である。そのため、航海者たちは航路上の様々な現地勢力と友好な関係を維持することが必要だったであろう。

このような沿岸航路上に分布する倭系古墳の被葬者は埋葬施設からみて九州の出身であったが、これについては帯金式甲冑の生産と配布が倭王権によって一元化されていた点をふまえ、倭王権の影響下で交易船の寄港と水先案内の役割を担って現地に居留していた倭人とする説〔權宅章2014〕や、倭との交通路を防衛するために沿岸航路の拠点に百済が配置した倭系軍事集団とみる説〔李正

鎬 2014] などがある。

ところで、古墳の築造は被葬者が現地に定着して生活し、その地で死亡したことを意味する。従って南海岸一帯の倭系古墳の被葬者が倭人あるいは倭系人とする、彼らは南海岸の処々の要衝地に定着していた可能性が高い。しかし導入期の倭系古墳は群をなさず大部分が単独で存在しており、現地に集団で移住して生活していた痕跡は見られない。そのため、倭系古墳の築造は一般的な墓制の拡散過程において説明するのは困難である。

一方、これらの導入期の倭系石槨、特に外島やペノルリなど島に残る倭系石槨の築造背景に関連して、文献に参考となる内容がある。倭に渡っていた百済の太子の腆支が、阿莘王が死亡した年(405年)に帰国する過程において、倭の兵士 100 人が同行し、漢城における変乱の際に倭人に自身を護衛させ、海の沖の島で待機していたという注目すべき記録⁽¹⁾である。この記録は百済と倭王権の密接な関係、倭人の韓半島への進出、航海における沿岸の島々の重要性を示すものとされる。ただし、この記録は百済と倭の間の多様な交流の中の特殊な事件であった可能性も念頭に置かなければならない。百済に入った倭兵の規模は 6 世紀段階でも 500 ～ 1000 人程度にとどまっており、実質的に物理力を行使することは難しかったであろう [金起燮 2014]。従って、倭系石室の被葬者について軍事的な側面を強調すること [李正鎬 2014] にも無理がある。

最近では、このような 5 世紀における倭系堅穴式石槨の築造の契機を倭五王の中国遣使と絡めて解釈する見方も提起されている [林永珍 2017]。ただし、これら倭系石槨は金海(栗下里 B-1 号墳)、天安(道林里 3 号墳)にも存在するため、百済とは無関係に全南の海岸・島嶼地域の馬韓勢力との協同という観点のみから解釈することは難しい。

このような点を考慮に入れ、筆者が精査した倭系古墳の築造背景をもう少し異なる角度から検討したい。すなわち倭系古墳は、倭人ないし倭系人が、在地集団と友好的な関係を維持し、交易路(航海路)の確保とその安全な使用の保障を象徴的に表現するために、沿岸航海において重要な島や陸地の主要観測地点に築造された可能性が想定されるのである。海岸沿いの丘陵の尾根上に単独で立地する状況もこのような象徴性を誇大化する行為であろう。そのような象徴として古墳が使用された理由は明らかでないが、古墳の築造が盛んに行われた時期であったことと関連する現象であろう。在地集団にとっても倭人や倭系人が自身の領域で活動することによって得られる代価があったため、倭系古墳の築造に主導的であったか、少なくとも同意して協力したであろう。このような観点から見ると、倭系古墳の被葬者は必ずしも倭人である必要はない。交流の必要性は倭と百済(加耶)の両方にあったため、現地の集団は沿岸航海における有利な立場を利用して、海上交易で必要な役割を担うことでその代価として百済(加耶)と倭の双方から威信財の金銅冠や武器類など入手し、在地社会でそれらを政治的に利用して成長したことが想定される。

ところで、南海岸地域に築造された初期の倭系古墳には百済墓制の特徴は見られず、百済の威信財も高興雁洞古墳で出土した金銅冠などしかなく、その数は極めて少ない。このような点に鑑みると、西・南海岸の海路を利用した交易において最も積極的に在地勢力を抱き込んだのは倭人であった可能性が高い。また、これらの地域に対する百済の政治的影響力は、金銅冠などの威信財を通じて一部の限られた地域に及んでいたのみであったことがうかがえる。

南海岸地域のこのような動向と軌を一にして、中西部地域でも倭系鉄鏃・甲冑・鉄剣・鉄矛など

を副葬した古墳が 5 世紀中・後葉頃に築造されたことが、天安道林里 3 号石槨墓⁽²⁾、清州新鳳洞古墳群、燕岐松院里 KM-094 号墓などから確認できる〔鈴木 2012〕。百済―倭王権を主軸とする交流に最初に南海岸地域勢力が加わり、続いて中西部および南部内陸地域の地域社会も参加していった状況がうかがえる〔以上、金洛中 2013 を抜粋・修正〕。

2. 九州系横穴式石室墓と前方後円形古墳

南海岸一帯で少数の倭系竪穴式石槨・横穴式石室が築造されて以後、5 世紀後葉からは九州系の横穴式石室墓が本格的に造られ続ける。これら横穴式石室を備えた古墳の中に墳丘形態が前方後円形を呈するものが出現するのである。

(1) 九州系横穴式石室墓

九州系横穴式石室墓は「栄山江式石室封土墳」〔林永珍 2000〕、「月松里型石室」〔朴淳發 1998〕、「栄山江類型石室」〔金洛中 2008〕などとも呼ばれているように、栄山江流域で主に造られた（図 2）。

栄山江類型石室は平面が長方形であるが、細かく観察すると奥壁側が広く羨道側が狭い逆台形を呈するものが多い。各壁は上方に向かって内傾させて積んだ四壁持ち送り、平天井を架構する。玄室入口は門柱石や框石などを備えた玄門設置式である。玄門には板石を立てて閉塞するものが基本であり、別途羨道に割石を積み二重に閉塞したものもある。羨道は前壁中央に敷設される両袖式である。海南方山里長鼓峰古墳を除き、玄室高÷羨道高が 1.5 以上と差が大きい。石材は花崗岩系の割石を主に使用し、下段には大型の腰石を設置したことが多い。これらの属性は日本の北部九州地方で 5 世紀後葉に定型化した北部九州型横穴式石室や、熊本で流行した肥後型横穴式石室において見られるものである。

これらの共通点を基準に一つの類型（栄山江類型）を設定したのであるが、属性の組成において細部的には多様性があり、造山式・長鼓峰式・月桂洞式・鈴泉里式に細分されている。しかし、個別の石室間には北部九州型の影響を受けながらも顕著な個性と変容がみとめられる。つまり、これらは単発的に築造されており、系統的な発展過程を求めるのは難しいのである。

栄山江類型石室は短い期間（5 世紀末～6 世紀前葉の約 30 年間）に急速に広がっており、地域共同体ごとに系統立って発展したものではないため、属性の連続的な変化を観察して型式学的に相対編年を構築するのは難しい。

一方、栄山江流域には九州系の石室だけでなく玄室入口に内側に突出した玄門施設がない開口式の石室も見られるが、これは百済の影響により出現したもので、熊津系類型とすることができる。このような百済系石室にも框石などの倭系要素が一部で見られる。

また、祖形となった石室との関係など、その系譜によって導入型・発展型・創出型などにも区分することができる。導入型は祖形となった石室の構造的特徴がほぼそのまま見られるもので、発展型は祖形となった石室の全体的な属性を保ちつつ石室が築造された現地の要素が加味され一部の特徴を変形・発展させたものである。創出型は、個別属性は様々な地域に源流が求められるものの、全体的には特定の地域に祖形を求めることができないものである。導入型は巨済長木古墳がほぼ唯一の代表例であり、栄山江流域では見られない。従って栄山江類型横穴式石室の築造にあたって

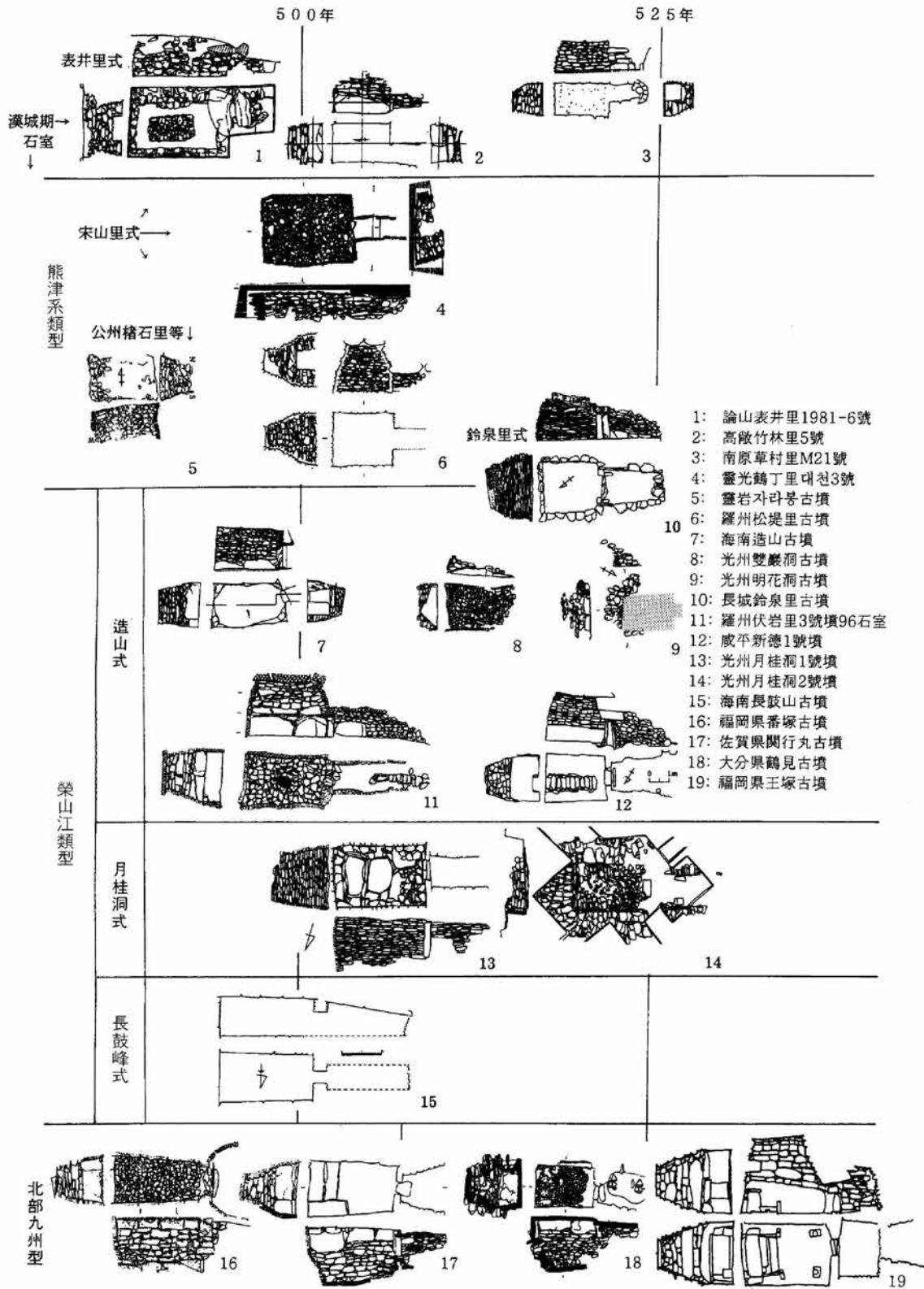


図2 湖南西南部地域における初期横穴式石室の変遷

中・北部九州の工人あるいは築造集団が必ずしも直接関与していたとみることはできない。北部九州型を基本としつつ、百済・在地・加耶の要素が築造集団である在地勢力の多様な選択によって複雑に表出したものと推定される。

(2) 前方後円形古墳

栄山江流域には 5 世紀末から 6 世紀前葉にかけて日本の古墳時代の代表的な墓制である前方後円墳と形態がほぼ同じ古墳が築造された。これらの古墳をどう呼ぶかという点に、その性格に対する見解の違いが示されているといえる。前方後円墳という用語は倭王権を頂点とする政治体制を象徴するものと考えられている。従って類似した古墳が分布する韓半島西南部が倭王権に服属した地域であったと誤解されるおそれがあるため、韓国でこれをそのまま使用するのとは適切でない。そこで、次善の呼称として「前方後円形古墳」という用語を用いたい。

前方後円形古墳は栄山江流域と高敞および海南の海岸沿いにのみ存在し、現在までの発掘調査および地表調査を通じて 15 基が知られている。このうち現在までに試掘または発掘調査されたものは 11 基である（図 3）。

前方後円形古墳は、栄山江流域でも大型専用甕棺を埋葬施設とする甕棺古墳が流行した潘南地域を取り囲むようにその外郭に分布する。光州月桂洞と高敞七岩里で 2 基が隣接して確認されている以外は、多くが 1 基ずつ点的に分布するという特徴がある。このような現象は、韓半島西南部地域の前方後円形古墳が非常に短期間に築造され、一地点に複数の古墳が造営されなかったことを物語るのであり、人為的な分散政策に基づく分布パターンとみることはできない。

前方後円形古墳の立地はこの地域の伝統的な墓制である甕棺墳とは共通するが、山裾に立地する百済の石室墳とは異なる。その規模は 55m 以下の中・小型墳と 70m 以上の大型墳に分けることができる。咸平と海南に存在する 70m 前後の大型前方後円形古墳は、当時北部九州勢力と密接な関係を結んでいた日本列島の畿内周縁部の地域大首長が埋葬された前方後円墳と似た規模である。中・小型といえども当時韓半島で築造されていた円墳や方墳に比べると大型であるといえる。

前方後円形古墳の平面形は円部と方部の比率、方部の形態により大きく二種類に区分される（図 4）。すなわち、前方部前端幅より円部直径がやや大きく円部直径と方部長さがほぼ同じでくびれ部が方部前端幅の 1/2 以上、方部の平面形が台形を呈す長鼓峰型（海南長鼓峰・龍頭古墳、咸平長鼓山古墳・新徳古墳、霊光月桂古墳）と、前方部前端幅が円部直径より広く円部直径に比べ前方部の長さが短く、くびれ部が方部前端幅の 1/2 以下で方部が三角形を呈す月桂洞型（光州月桂洞・明花洞古墳、咸平馬山里古墳、高敞七岩里古墳）に分けられる。長鼓峰型には海岸に立地する大型古墳が多く、石室と墳丘の長軸が直交するか一致するのに対し、月桂洞型は栄山江流域に主に分布し、中・小型墳で石室の入口がくびれ部に向くものが多く、二つの類型間に若干の排他性が観察される。このような現象は古墳造営集団ごとに前方後円墳の情報入手ルートが異なっていた可能性を思わせる。

日本の古墳時代の前方後円墳には外部施設として周溝・周堤・段築・葺石・埴輪があるが、これらをすべて備えたものは倭王権中心部の超大型古墳に限られる。栄山江流域の前方後円形古墳では発掘調査の結果、すべてで周溝が確認されており、一部で葺石・埴輪が確認されている。ただし日

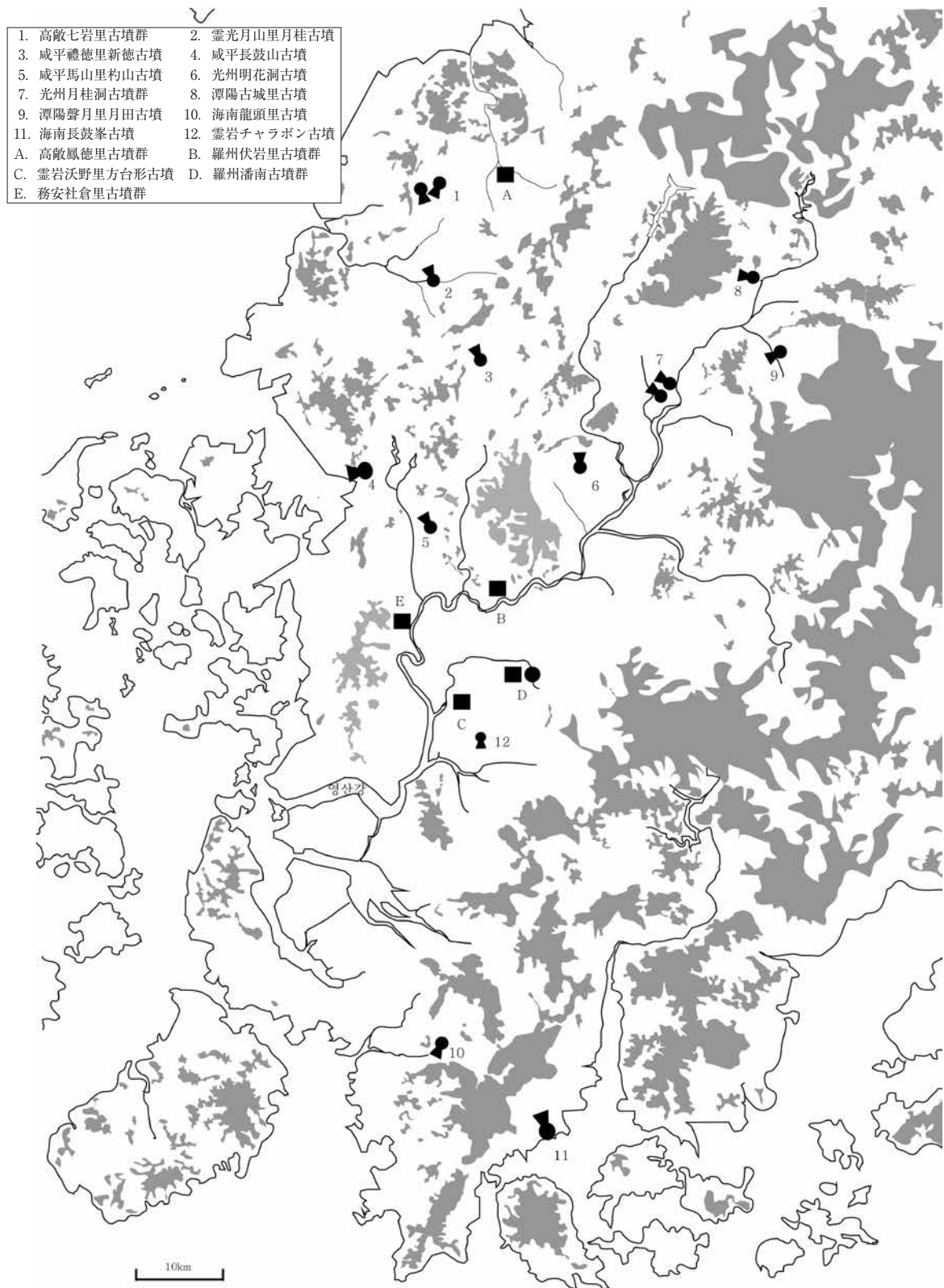


図3 栄山江流域における前方後円墳分布図

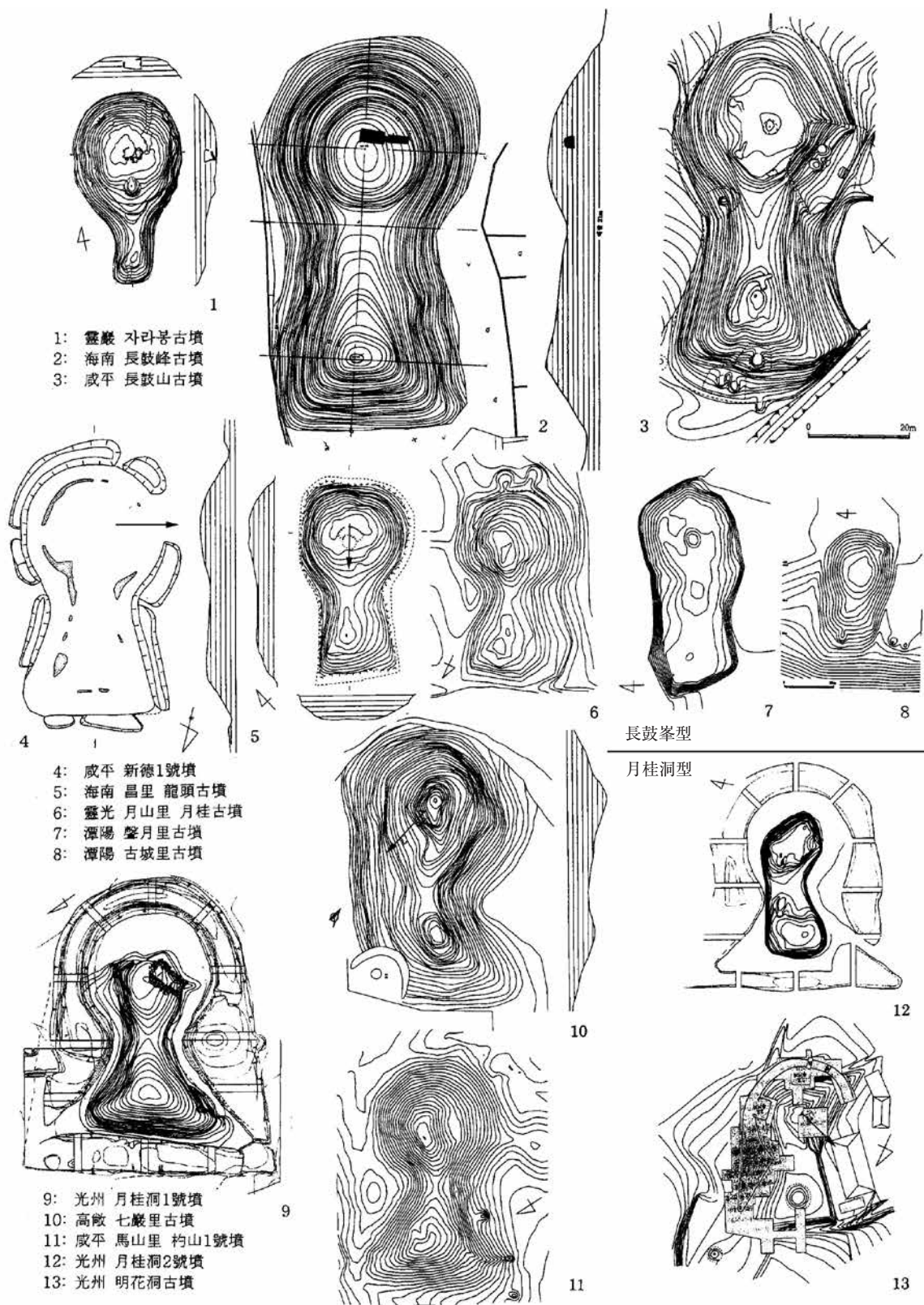


図 4 柴山江流域における前方後円墳の形態

本の前方後円墳では2～3段にわたって見られる本格的な段築と、くびれ部において葬送関連祭祀が行われた場所と考えられる造出しは確認されていない。日本でも畿内以外の地域の前方後円墳で段築・葺石・埴輪をすべて備えた例は稀である。従って栄山江流域の前方後円形古墳を日本の畿内地域の典型的な前方後円墳と比較して違いを論じることは、その性格を正しく理解する上で適切でない。

埋葬施設はすべて円部にあり、霊岩チャラボン古墳を除くとすべて北部九州系の横穴式石室である。⁽³⁾ 石室は墳丘中、つまり地上に位置しているが、この点は栄山江流域の伝統的な墓制と符合する。日本の前方後円墳でも横穴式石室の段階以来、埋葬施設は墳丘中に設置されている。

副葬品は系統が様々である。蓋坏・壺などの在地的なものはもちろん、百済から入手した威信財、倭に関連する文物など多様なものが副葬されており、複合的な性格を有している。

韓半島の前方後円形古墳の被葬者に対するこれまでの見解は、大きく在地勢力説と倭系勢力説に分かれる[金洛中 2011a]。在地勢力、倭(系)勢力および百済王権が関係して出現したものであることは明らかであるが、この三者の力学関係がどのようなものであったのか、各研究者がどれに重点を置いているかにより、少しずつ意見が分かれている。被葬者に対する見解の違いは、百済と栄山江流域集団の関係に関する解釈の差とも関連している。出現の歴史的背景としては、周辺国の政治的変動、つまり高句麗の南進による百済の混乱とそれに伴う南方への勢力拡張、そして同様に倭王権の勢力拡大に伴う日本列島の政治的動揺および統合という点が論じられている。

前方後円形古墳の出現は栄山江流域と倭勢力だけの一方的で単線的な関係ではなく、多元的で複合的な関係の産物である。つまり前方後円形墳丘などの倭系要素が見られることから、これをすぐさま倭人の墓と断定するのは難しい。埋葬施設の横穴式石室も北部九州型ではあるものの、在地の要素が混在して発展した様相を示しており、最終的に栄山江流域のみで見られる独特な形態(創出型)を作り出している。このような点は被葬者の出自を考える上で極めて重要である。

前方後円墳という倭系要素が現れたこと自体は当然交流の結果であろうが、その交流の背景が政治的なものであるのか経済的なものであるのか、あるいはより複雑に絡み合ったものであるのか、明らかにするのは難しい。ただし単純な交流によって政治的記念物である古墳が築造されたとは考え難い。

また、石室などの要素から主要な交渉相手は九州勢力であったとされるが、月桂洞古墳の木製埴輪周物(訳注:埴輪形木製品)のように畿内系の遺物もあるため、二元的な交流システムがあったことも考慮すべきである。

韓半島にある前方後円形古墳を含め、前方後円墳は本来倭政権と呼ばれる首長連合の政治構造・政治秩序と密接に関連して造られたものであるが、それにはそれぞれの地域に応じた一定の役割があったとされている。前方後円墳の造営がはたした役割は一元的ではなかったため、地域ごとの事情を考慮に入れ、多角的に検討する必要がある。日本列島の場合とは異なる意味と必要により、栄山江流域圏でも当時の事情に応じて造営されたとみる観点が必要であろう。

(3) 被葬者と築造背景

① 被葬者

以上に検討した九州系横穴式石室墓と前方後円形古墳の被葬者は、墓制のみから判断すると倭系の人物とみることができる。しかし、専用甕棺・堅穴式石槨など在地の埋葬施設から墳丘を拡張していく過程で倭系埋葬施設を導入していったことがよくわかる羅州伏岩里3号墳や固城松鶴洞1号墳、そして土着墓制の梯形墳群が造営された丘陵の南側に前方後円形古墳とそれに続く円墳群（百済系石室の群集墳）が隣接して築造されたことから古墳群造営集団の連続性が推定できる咸平馬山里杓山古墳群などの事例を考慮に入れると、埋葬施設と墳形のみから被葬者の出自を断定するのは難しい。また、栄山江流域に築造された九州系横穴式石室は、その祖形である九州の石室をそのまま模倣したものはほとんどない。在地における変化と発展を経て九州では見られない新しい創出型も造られる。前方後円形古墳も日本の典型的な前方後円墳に見られる重要な要素、例えば葺石や段築などが省略されており、取捨選択された姿であるといえる。加えて埴輪を模して墳丘に立てられた土製品も、製作技法や文様からみて在地で製作されたものである。墳形は前方後円形で埋葬施設は百済系の堅穴式石室である霊岩チャラボン古墳などの例もある。さらに、前方後円形古墳の築造には本来莫大な労働力が投じられるものであるが、それだけの労働力を徴発するためには在地集団に対する支配が確立されていなければならないはずである。つまり、在地集団に対する支配力なくしては古墳築造が不可能であるため、現地に基盤がない倭人が前方後円墳を築造するのは難しいといえる。また、百済によって栄山江流域に倭系人が派遣されたとして、彼らが百済王権の配下であったならば、百済式でない倭王権の墳形を採用している点も理解し難い。

このように九州系横穴式石室と前方後円形古墳の築造は、在地集団が主導していた可能性が高い。ただし、光州月桂洞古墳群のように前方後円形古墳2基が続けて築造され、埋葬施設に中部九州で流行した石屋形が設置されているような場合、その古墳の被葬者が倭人であった可能性を完全に否定するのは難しい。

石室構造に見られる多様な特徴だけでなく、副葬遺物においても、蓋坏をはじめとする在地系の栄山江流域式土器、百済系の金銅飾履・壺鐙・三葉文環頭刀など、倭系の須恵器に類似した有孔広口小壺など、加耶ないし新羅系の羅州伏岩里3号墳96石室出土の十字文鏡板轡や心葉形杏葉などのように、非常に複合的で多元的な様相を呈している。

以上のように、古墳が大型で副葬品の系統が多元的であるほど、被葬者は在地の人間である可能性が高くなるといえる。

② 築造背景

九州系横穴式石室と前方後円形古墳の築造背景は百済と倭の情勢と深く関連する。威信財などからみると、5世紀中・後葉以降に栄山江流域勢力は既に百済王権と密接な政治的関係を築いていた。ところが、高句麗の侵略による南遷以後、百済は栄山江流域に対する間接的支配を転換し領域支配を進める必要が生じた。しかし、この段階では栄山江流域勢力を領土化して直接統制する力はまだなかった。この百済の混乱期に栄山江流域諸集団は政治的な成長の機会を得たものと考えられる。このような状況下で、倭王権と百済王権の交流において重要な役割をはたし得る地政学的位置が、

栄山江流域勢力の成長を促進させたのであろう。倭王権や九州地域勢力も百済と交流するためには栄山江流域勢力の協力が必要であった。そのため、地理的に隣接し以前から交流があった栄山江流域勢力と九州地域勢力が協力関係を結んだのであろう。

一方、5世紀中葉以降、韓・倭交易ルートが変化して新羅および百済の加耶地域に対する影響力が拡大し、鉄素材を円滑に受給できなくなった倭では、それまでの鉄素材確保のための対外的軍事行動を軸に形成されていた連盟に地域首長層が積極的に参加する必要が減った。それによって6世紀前葉から中葉にかけて倭王権の求心力が低下し、政治支配秩序が動揺して有力層相互の覇権闘争が続く〔松木 2005〕。つまり、九州の地域集団だけでなく、倭の王権も新しい先進文物導入の窓口を先に確保する必要があったのだと思われる。

5世紀後葉から6世紀前葉には、高井田山古墳のような畿内地域の百済系石室などに見られるように、百済王権から倭の王権へ直接つながる交流の軸があり、それぞれの王権がいまだ直接管轄してはいないものの、相互交流の極めて重要な中間地域に北部九州型(系)石室が分布するようになる。つまり、北部九州型(系)石室は百済王権―栄山江流域・慶南海岸勢力―北部九州勢力―畿内周縁の有力勢力―倭王権とつながる交渉ルートにおいて北部九州勢力の影響力が大きく、韓半島と日本列島内においてそれぞれの王権の影響力が間接的に及んだ地域に分布しているのである。このような状況からして、北部九州勢力とその韓半島内のパートナーである栄山江流域・慶南海岸勢力が百済・大加耶―倭王権の交渉に重要な役割を果たしたことは間違いないであろう。栄山江流域勢力と西部慶南の加耶勢力は、百済や大加耶の積極的な進出による直接支配を容認するよりは、九州勢力との積極的な交渉を通じて独自の立場を築こうとしていたようであり、その過程で協力的なパートナーであった北部九州の墓制が導入され、協力関係を象徴する手段として使用されたものと考えられる。

ところで、栄山江流域の初期の横穴式石室墳は単独で築造されており、造山式や松鶴洞―長鼓峰式などのように一つの類型として設定できるほど類似した構造を持つ石室もあるが、築造規制による規格化がみとめられるほどではない。特定の石室の系譜が時間的・空間的に拡大していないのである。これは個別に横穴式石室墳を築造していた地域集団を統合できるほど広範囲に勢力を及ぼし得る核心的な地域集団が出現しなかったことを表す。

一方、前方後円形という異質な形態の古墳の築造は栄山江流域の新興勢力が倭、特に九州地域勢力の対韓半島交渉において優先的なパートナーであったことを表象する行為の一つだったのであろう。前方後円形古墳が既存の墓域から離れた地域や、当初から古墳が存在しなかった地域に単独で築造されたことは、このような象徴性の極大化に関連する現象である可能性がある。このように前方後円形古墳は、栄山江流域勢力が百済王権と距離を保っていた表象として、そして倭の地域勢力との政治的紐帯の象徴として築造された可能性が高い。

以上のように、百済の一時的な滅亡と地域勢力との関係再編、および倭の継体期を中心とした日本列島内の政治的変革を背景に、栄山江流域と慶南西部海岸に前方後円形古墳と九州系横穴式石室が出現した。地域勢力に対する柔軟な政策の過程で表舞台に現れた北部九州勢力は、百済王権―倭王権の直接の交渉が低調になった状況を利用して別個に、またはそれを補完する形で対韓半島交渉ルートを構築しようと目論んだ。百済と密接な関係を保ちつつも一定の政治的距離を維持しようと

していた栄山江流域の一部勢力が、外部の威信を利用するために北部九州勢力と結び、韓半島内のパートナーとして活動したのであろう。栄山江流域勢力、北部九州勢力および北部九州系石室が分布する地域の勢力は、百済と倭王権に完全に従属してはおらず、また対立してもいなかった。単に情勢の変動期に2つの王権間で実利を求める方法を模索していたのであり、それが栄山江流域—南海岸—九州—倭王権外縁地域（若狭など）など北部九州系石室が築かれた地域を結び付けた背景ではなかったかと考えられる〔金洛中 2008・2009〕。

3. 古墳に立て並べられた土製品

倭系墓制とともに注目されるのが「墳丘樹立土器」「墳周土器」とも呼ばれる円筒形土器である（図5）。円筒形土器は日本列島で古墳時代に前方後円墳などの墳丘に立て並べられた埴輪と形態・用途が類似しており、それに関連すると考えられる土製品である。

ここでは筆者の前稿〔金洛中 2009〕をもとに、近年の調査・研究成果をふまえてこの土製品の意味について簡単に触れたい。

円筒形土器は日本の植民統治時代に調査された羅州新村里9号墳で初めて確認されたが、光州明花洞古墳などの前方後円形古墳で本来の位置がわかる資料が出土したことで注目されるようになった。円筒形土器は羅州安山里長燈遺跡の梯形墳など、栄山江流域の在地古墳でも確認されている。また近年には、群山などで前方後円形古墳に樹立されたものより時期が古く形態も異なる円筒形土器が出土している。一方、風納土城経堂地区でも埴輪と製作技術がほぼ同じ土器片が出土しているが、搬入の背景や使用の脈絡は明らかになっていない。このように、円筒形土器は百済と倭の交渉、そしてそれに加わった栄山江流域など地域政治体の動向を把握する上で重要な端緒となっている。

円筒形土器は現在30遺跡あまりで確認されているが、栄山江流域とその周辺の海岸地域に集中しており、分布は前方後円形古墳とはほぼ一致する。他には群山一帯や西部慶南の固城松鶴洞1号墳、巨済長木古墳で出土しているのみである。

円筒形土器は大部分が古墳から出土する。前方後円形古墳において最も多く確認されているが、在地的な墳形といえる梯形墳、方台形墳および円墳でも出土している。一方、最近では住居址や祭祀に関連する溝などでも確認されている。

円筒形土器の形態は壺形と筒形に分けられる。筒形は円筒と壺筒（朝顔形）に細分される。

前方後円形古墳が本格的に造営される以前に出現した円筒形土器は壺形のものである（図5下段）。壺形のものは若干胴張りの円筒形で、口縁が大きく開いており、底部には円形の穴があけられている。群山築山里鶏南遺跡出土品のように、長い筒形の胴部に壺をのせたような形態のものも一部で見られる。このような壺形円筒形土器は、木棺や甕棺、あるいは石室を埋葬施設とする方形・梯形・方台形墳に樹立された。壺形の中で最も古いものは、材質・形態・大きさからみて錦江河口に近い群山地域出土品であろう。その年代は、群山築洞2号墳で共伴出土した無文の青灰色硬質丸底壺、深鉢形土器、大型甕棺などから4世紀中葉まで遡るとみられる。古墳にこれらの土製品を立てめぐらせて儀礼に用いている点や底部に穿孔する点が共通することから、形態的にも一部で類品が見られる倭（特に九州）の壺形埴輪にその系譜を求めるのが一般的であったが、最近では牙山一帯の周溝土壙墓から出土する円筒形土器との関連性も指摘されている〔崔盛洛・金ソンミ 2012、林永

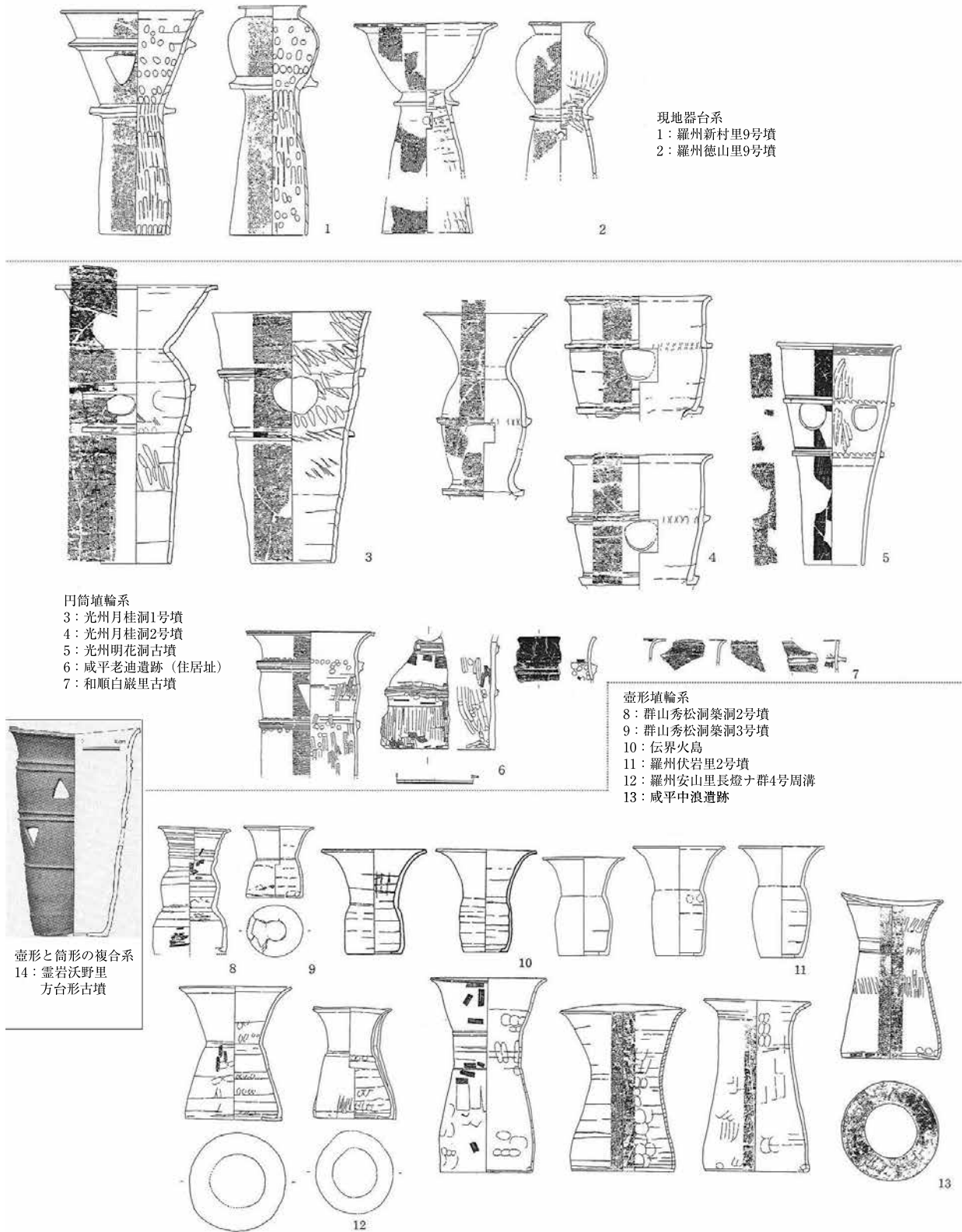


図5 円筒形土器の分類

珍 2015]。九州の壺形埴輪の中では明確な祖形となる例が見出し難く、壺形円筒形土器以外の他の倭系墓制の形跡が見られない点が壺形埴輪起源説の弱点である。一方で、中西部地域において円筒形土器が葬制の一部として用いられていたことは疑いないが、それを栄山江流域圏の壺形円筒形土器と結び付けるには、器形・製作技法・用途および流行時期などに見られる差が説明できない。さらに、群山築洞2号墳、築山里鶏南遺跡で出土した、上面に凹凸が残るほど強く回転成形した一部の円筒形土器は、ソウル夢村土城出土の円筒形土器との類似点もあるため、百済中央との関連も完全に否定することはできない。円筒形土器の系譜を考える際に重要なことは、形態的な類似性よりも、墳墓で葬送儀礼に関連して使用されたという点であろう。筆者は、壺形円筒形土器は、百済と倭の通交の中で倭墓制の一部の要素を受容して古墳を築造した在地勢力が創造した器形である可能性が高いと感じている。このような壺形円筒形土器は、日本とは異なる発展過程を経て、6世紀後半には逆に日本列島に渡って流行する。

一方、霊岩沃野里チャンドン1号墳出土品は底部に穿孔されているが、全体的な形態は円筒形であり、壺形と筒形の複合的な様相を示す。

次に、前方後円形古墳が築造されていた時期には、日本の円筒埴輪および朝顔形埴輪と最も類似する筒形が出現する。ただし、栄山江流域では日本の円筒埴輪とは異なり突帯が2条のみのものが流行する（図5中段）。

これとは別に、羅州潘南古墳群築造集団は、埴輪樹立のアイデアをもとに在地の器台に似た形態の独自の円筒形土器を作って墳丘に立てた（図5上段）。これに類似した円筒形土器は高敞旺村里遺跡でも出土しており、栄山江本流と高敞地域集団の間の密接な関係がうかがえる。

以上のように、韓半島西南部地域における墳墓築造の過程で日本の埴輪と類似する外部施設を採用したのは4世紀中葉からであり、その出現の背景には倭と百済の通交があったものと考えられる。このような交流に韓半島西南部の地域集団が参入することで、栄山江流域にも埴輪形土製品が導入され流行したのであろう。5世紀後葉まで梯形および方形墳丘墓を中心に壺形円筒形土器の樹立が流行する（円筒形土器1段階）。そして前方後円形古墳と北部九州系石室の出現に見られるように倭との関係が急激に密接になり、典型的な円筒埴輪に通じる2条突帯の円筒形土器が出現する（円筒形土器2段階）。ところで、日本列島で盛行した様々な埴輪のうち、動物形埴輪など葬送儀礼に直接関連する形象埴輪は、現在咸平金山里方台形古墳〔文安植ほか2015〕で確認されているのみであるが、それも正確な出土状況はわかっていない。被葬者を納めた場所や儀礼空間を画するための円筒形のみが主に受容されている点、集線文タタキなど現地の製作技術が適用されている点などを考慮すると、工人の移動など倭の直接的な影響でこれらの円筒形土器が韓半島西南部地域に現れたとみるのは難しい。つまり、祭祀という本質的な部分よりは、墳丘に樹立するという形式のみが一部受け入れられ、各政治体間の関係設定において一つの象徴として用いられた可能性がある。このような理由から、様々な埴輪の中で最も簡素な形態の円筒埴輪が選択されたのであろう。以上のように、円筒形土器は百済と倭の通交と、それに参入した地域勢力、特に栄山江流域勢力の成長とその背景をうかがう上で重要な資料といえる。

4. 横穴墓

栄山江流域で九州系横穴式石室や前方後円形古墳が築造されていた頃、公州や扶余一帯では別の種類の倭系墓制である横穴墓が築造されており注目される（図6）。

横穴墓とは、凝灰岩や砂岩など比較的軟質の岩石で形成されている丘陵や台地の斜面を掘削して埋葬用の空間を構築した墓制である。横穴墓は4世紀末～5世紀初めに九州北部に導入された横穴式石室の影響で5世紀中葉～後葉に九州東北地域（豊前）に出現し、地域的な偏在を見せながらも日本列島各地で後期群集墳の一型式として盛行した倭独自の横穴系墓制と考えられてきた〔柳沢2005〕。

韓半島における横穴墓は、日本の植民統治時代以降しばしば調査されてはいたものの注目されずにより、2004年に公州丹芝里遺跡で残存状況が良好で副葬品も完全に遺っていた横穴墓群が発掘調査されるに至り、本格的な研究の対象となった。

百済地域の横穴墓は、熊津・泗沘都城の外郭と両地域を結ぶ線上に限られた分布を見せる。扶余方面に行くほど規模が小さく、群集する数も少なくなり、時期も下るものになるため、横穴墓の造営は公州一帯で始まったことがわかる。

24基の横穴墓が確認された公州丹芝里遺跡以外には、3基以上が群集するケースはほとんどない。公州安永里一帯には、隣接する丘陵ごとに1～2基の横穴墓が別の墓制と共存している。横穴墓を築造した人々が在地の集落単位に定着していたことを物語る事例である。

横穴墓は横穴式石室墓と混在するケースや、それとはやや地点を異にして立地するケースがあるが、古墳群内では少数を占める墓制である。公州熊津洞遺跡や扶余午守里遺跡などで横穴墓と共存する横穴式石室墓の被葬者は、横穴墓に埋葬された人物を受け入れた在地の有力者か、横穴墓の被葬者とともに活動した倭人のうち百済において官人などの高位職に就いていた人物である可能性がある。

韓半島の横穴墓は墓道・入口・玄室からなる。羨道がないのが特徴である。玄室の長軸は墓道と同方向であるが、等高線と直角をなす縦方向（縦長式：A式）と、等高線と並行する横方向（横長式：B式）がある。これ以外にも、遺骸安置施設は在地の瓦棺や甕棺を利用し、墓壙のみ横穴墓に類似したものを設けた変容形もある（C式）。公州と扶余で見られる横穴墓の構造は、九州地方の5世紀後半～6世紀前半の初期型式（なかでも特に福岡県行橋市竹並、大分県上ノ原など豊前北部の横穴墓）に類似する。

公州丹芝里遺跡の横穴墓は、各種土器類、鉄器類とともに紡錘車が一点ずつ副葬されている点が特徴である。すべての横穴墓の出土土器類が同じ器種構成ではないが、ほぼすべてが百済土器の器種である。ただし一部の土器の製作技術、特に調整技法に須恵器の影響が見られるものがある。土器類以外にもほぼすべての横穴墓に鑄造鉄斧、鉄鎌、刀子などが副葬されていた。鉄器はすべて農工具類で、武器類がない点が注目される。北部九州の上ノ原横穴墓群で主に初葬者を中心に鉄剣・鉄刀・鉄鎌など武器類が副葬されていた状況とは異なる点である。一部金銅製耳飾が副葬されていたものもあるが、威信財とみられるものは副葬されていない。

公州丹芝里遺跡の横穴墓では土器類が多く出土しており、時期推定の端緒となっている。土器類

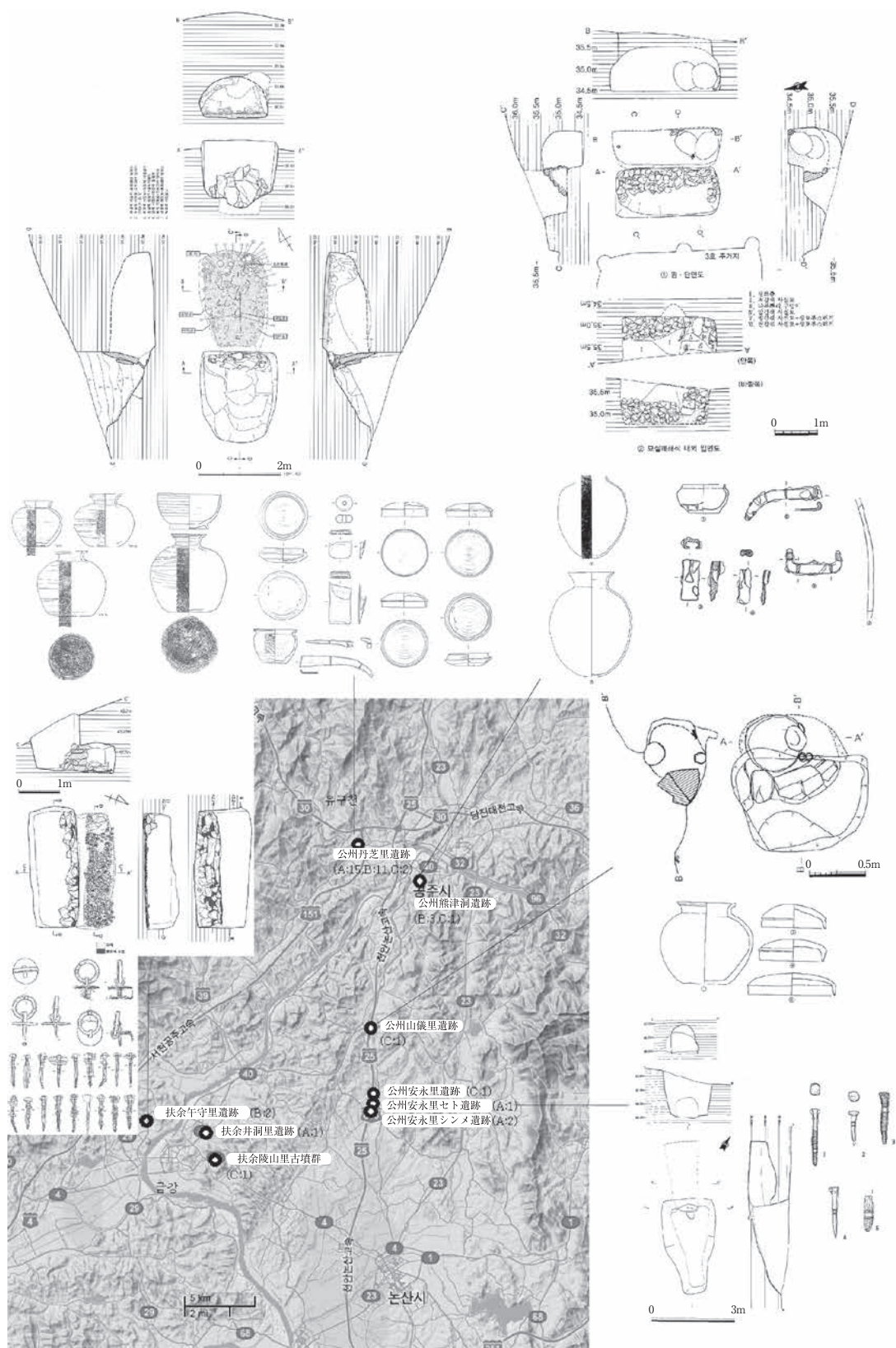


図6 横穴墓の分布と代表的な事例

は、蓋坏および三足器の形態変化、須恵器系蓋坏および高坏の型式などからみて5世紀末～6世紀初めの熊津期に該当する。埋葬施設が甕棺のもの（C式）は泗沘期まで下るとみられる。

このように韓半島における横穴墓は一時的・局地的に築造されたものである。これは特定の性格を持つ集団が一時的に墓域を形成していたことを示唆するものである。横穴墓が北部九州で流行した墓制である点を考えると、被葬者は倭（系）人の可能性がある。横穴墓は構築にさほど技術を要しない墓制で、封土も明確でないため、横穴式石室より低位相の感がある。丹芝里遺跡を除くと古墳群内における横穴墓の比率は少数である。丹芝里のように横穴墓を造営した倭（系）人が集団で定住していたことを示唆する例もあるが、大部分は既存の在地集団の中に少数が編入されていた可能性が高い。もちろん倭系人のすべてが横穴墓のみを築造していたとは考えられず、一部の高位階層の人物は同一墓域にある横穴式石室墳にも葬られたであろう。

韓半島の横穴墓に関連して注目されるのが『日本書紀』雄略23年条の記事である。479年に百済の三斤王が死ぬと雄略は倭国で生まれ育った末多王（質として倭国に来ていた昆支の第二子でのちの東城王）が帰国する時、「筑紫国軍事五百人」に護衛させた⁽⁴⁾。軍事力を背景に独自の勢力になる恐れがあったこのような集団は、直接の統制区域でない地域に配置するよりは、中央官僚として活用したり王京軍に編制した可能性が高い。このような状況と符合するのが、倭系墓としては副葬品などに在地定着の痕跡が強く、都城付近に造営された横穴墓であろう。

公州・扶余一円に造成された横穴墓は、形成の時期と墓制の源流が栄山江流域の前方後円形古墳と同様に北部九州と深く関連している。そうすると、なぜ前方後円墳が栄山江流域に、横穴墓が百済の都城である公州と扶余に限定的に造営されたのかを明らかにすることが極めて重要な課題となってくる。

栄山江流域の前方後円形古墳および初期横穴式石室と公州地域の横穴墓は同じ九州系であるため、北部九州勢力が関与しているのは明らかであるが、その出現の脈絡には差があると考えられる。つまり、公州丹芝里古墳群の例に見るように、横穴墓は百済の横穴式石室の古墳群に隣接、あるいは一部混在しており、副葬品も百済土器が主流であることから、百済王権の直接の統制のもとに倭王権と一定の関係を結んでいた九州系の人々が定着して造った古墳であるといえる。これに対し、栄山江流域の前方後円形古墳は、上述のように百済や倭王権の直接の関与よりは、北部九州勢力を中心とした九州系石室ネットワークに組み込まれた栄山江流域の地域集団が主導的に受容することで出現したものとみられる。

栄山江流域で北部九州系横穴式石室と前方後円形古墳という最上位墓制が築造された反面、公州・扶余地域で下位墓制にあたる横穴墓が少数のみ百済の石室墓の墓域で築造されたという点は重要である。自発的であれ百済王権の意図によるものであれ、横穴墓築造集団の独立化は抑制されていたと考えるべきである。高塚が政治的・社会的な記念物としての性格を強く持っている反面、横穴墓は血縁を基盤とする親族集団の群集墳であり[田中1995]、記念物的な性格は強くない墓制である。従って韓半島で横穴墓が造られた背景には、その墓制を採用した階層の人々が定着していた可能性がある。栄山江流域で活動した倭人や倭系人にも様々な階層の人々がいたと思われるが、横穴墓が築造されなかったことから、実際には当該地域で活動していたその階層の集団が死亡した際に、そこに葬られなかった可能性を物語っている。

結論として、公州周辺に分布する横穴墓は、百済と倭の政治・経済・軍事的交流・交渉に参入し、百済中央で活動した倭系人が定着することによって遺された墓制と思われる。丹芝里遺跡の事例が物語るように、それらの倭系人が集住することもあったが、大部分は公州・扶余一円に分散し在地勢力に吸収されて生活していたと推定される〔金洛中 2012b〕。

②……………栄山江流域勢力・百済と倭の交流相—あとがきにかえて

以上に見た内容から、栄山江流域勢力・百済と倭の交流相に見られるいくつかの特徴をまとめると次の通りである〔金洛中 2015〕。

まず百済地域に遺された倭の文物は、都城よりも栄山江流域など特定地域に偏重している。しかし百済と倭王権が直接の交渉ルートを持っていたことは、畿内に遺る 5 世紀代の百済の文物（横穴式石室、大壁建物、土器、竈の焚口枠など）から十分に推測できる。従って倭系文物の地域的な偏重は、百済—倭の双方交渉の実務的な役割を、地理的に近い栄山江流域と九州地域勢力が主導的に担ったために現出した現象であると考えられる。

このように、百済の対倭交流において、栄山江流域勢力が関門地域の利点を生かし重要な役割を担ったことがわかる。韓半島西南部に進出した倭人たちを通じて栄山江の在地勢力が交渉した倭のパートナーは、墓制（石棺系竪穴式石室および北部九州系横穴式石室）や栄山江流域系遺物が副葬された七夕池古墳、梅林古墳、番塚古墳、正籠 3 号墳などの存在から、主に北部九州勢力であったと思われる。

栄山江流域圏の倭系古墳に副葬された遺物には、甲冑類のような倭王権に関連する威信財がある。それに対し、漢城や熊津で発見される倭系文物は土器、埴輪片、下位階層の横穴墓などに終始する。百済王権では威信を保つために必要なものを倭に求める必要があまりなかったことを物語っている。百済王権が中国から磁器などを入手して再分配していたことは相対する状況である。百済が倭に求めたのは特産品や軍事的な支援など、実効的な部分であった可能性が高い。それに対し、百済と倭の交流で重要な役割をはたした栄山江流域などの地域勢力には、関係維持に必要な様々な品物が倭から入っていたのである。

倭系文物は時期と地域により出土する遺構の性格が異なる。早い時期、すなわち 5 世紀中葉以前には、西南海岸に沿って分布する倭系古墳から主に出土する。海岸部だけでなく清州新鳳洞古墳群のように内陸の在地古墳にも 5 世紀前半段階の倭系鉄鍬など倭系遺物が副葬されている。しかし海岸沿いの高塚化した古墳や内陸の在地古墳および生活遺跡では、次第に多様な起源を持つ文物とともに副葬されるようになる。在地勢力との融合を見せるのである。

百済圏域における倭系文物は、加耶系文物と共伴するものが多い。これは百済と倭の間で加耶の諸勢力も一定の役割を担っていたことを示している。

倭系文物には、埋葬儀礼に用いられたものであっても、武装に関連するものが多い。例えば軍事的な性格の帯金式甲冑などである。これは高句麗との緊張関係にあった百済王権が倭の軍事的支援を必要とした状況に関連するものであろう。倭人は軍事的な支援の代価として百済中央および地域勢力から先進文物を積極的に入手していたのであろう。

百済と倭の交渉・交流における中心軸はそれぞれの王権であった。しかし地域勢力の参入と百済王権の関与の程度は地域により多様であったと考えられる。倭人が各地域勢力と関係を結ぶ際に百済王権が積極的に介入した場面もあったであろう。このことは、清州新鳳洞古墳群など中西部地域の状況からも推測できる。つまり、すでに百済の直接の影響下にあった中西部地域では、親倭的な集団が百済王権の必要と支援により、地域内で優位な勢力として成長しつつ対外（加耶・倭）交流と対高句麗・対新羅防御基地の役割を担っていたのであろう。しかし西南海岸地域勢力の成長と対倭交渉に、5世紀後半に至るまで百済が積極的に介入していたかどうかは疑問が残る。なぜならば、高興雁洞古墳などいくつかの例外を除き、そのことを示す考古資料がほとんど見られないためである。

日本列島にはオンドルなどの住居施設や炊事用土器など、馬韓・百済系集団が移住・定着した痕跡が遺っているが、百済地域にはそのような痕跡は明確でない。これは倭人たちが百済に進出し活動した理由が移住・定着ではなく、比較的短い期間に終えることができる活動、例えば軍事支援などであったためであろう。

註

(1)——阿莘在位第三年立為太子六年(397)出質於倭国十四年(405)王薨王仲弟訓解撰政以待太子還国季弟磔礼殺訓解自立為王腆支在倭聞訃哭泣請歸倭王以兵士百人衛送既至国界漢城人解忠來告曰大王弃世王弟磔礼殺兄自王願太子無輕入腆支留倭人自衛依海島以待之国人殺磔礼迎腆支即位妃八湏夫人生子久尔辛(『三国史記』卷第二十五百济本紀第三)

(2)——1・3～6号石槨墓において倭系墓制の影響が見られる。壁石と墓壙の間に河原石を厚く充填し、上部には広く積石を施す。棺釘と鏝を使用する点や蓋が木板である点においては差が見られる。百済土器とともに古墳時代中期後葉の比較的早い段階(TK208型式期)の眉

庇付冑、短甲、頸甲、肩甲、倭系鉄鏃および鉄矛などの倭系武装がセットで出土している(鈴木2012)。

(3)——最近発掘調査された高敞七岩里古墳の埋葬施設は石棺形構造の石室と発表されているが(金武重・林智娜2015)、墳丘内における埋葬施設の高さや類似事例の検討など、追加の調査および研究が必要である。

(4)——『日本書紀』卷第十四 雄略天皇 廿三年 夏四月(479年陰4月): 廿三年夏四月 百済文斤王薨 天王 以昆支王五子中 第二末多王 幼年聡明 勅喚内裏 親撫頭面 誠勅慰勸 使王其国 仍賜兵器 並遣筑紫国軍士五百人 衛送於国 是為東城王

参考文献

(韓国語)

權宅章 2014「高興野幕古墳의 年代와 登場背景에 대한 檢討」『古墳을 통해 본 湖南地域의 對外交流와 年代觀』(第1回古代古墳國際學術大会) 国立羅州文化財研究所

金起燮 2014「百済가 미워서 나라 이름조차 바뀌버린 歷史記錄, 広開土王碑」『金石文으로 百済를 읽다』学研文化社

金洛中 2008「栄山江流域 初期横穴式石室의 登場과 意味」『湖南考古學報』29 湖南考古学会

金洛中 2009『栄山江流域古墳研究』学研文化社

金洛中 2011a「韓半島 前方後円形古墳의 研究現況과 課題—被葬者の 性格을 中心으로—」『考古學 發掘과 研究—50年の 성찰』周留城

金洛中 2011b「葬制와 副葬품으로 살펴본 栄山江流域 前方後円形古墳의 性格」『韓半島의 前方後円墳』(大韓文化遺産センター編) 学研文化社

金洛中 2012a「土器를 통해 본 古代 栄山江流域 社会와 百済의 關係」『湖南考古學報』42 湖南考古学会

金洛中 2012b「百済地域에서 確認된 横穴墓의 意味에 대하여」『公州 丹芝里 横穴墓에 나타난 百済의 國際性』(韓・

-
- 日間 横穴墓 比較 研究 国際学術大会) 忠清文化財研究院・古墳文化研究会 pp.37-54
- 金洛中 2013 「5～6世紀 南海岸地域 倭系古墳의 特性과 意味」『湖南考古學報』45 湖南考古学会
- 金洛中 2015 「百濟에 남겨진 倭의 文物」『韓國史 속의 百濟와 倭』(百濟學研究叢書 争点百濟史6) 漢城百濟博物館
- 金武重・林智娜 2015 「高敞七岩里古墳」『2014・2015 湖南地域文化遺蹟發掘調査成果』(第13回湖南考古学会遺蹟發表会) 湖南考古学会
- 文安植・李凱起・宋章宣・崔權鎬・林東中 2015 『咸平 金山里 方台形古墳』財団法人全南文化藝術財団全南文化財研究所
- 朴淳發 1998 「4～6世紀 榮山江流域의 動向」『百濟史上의 戰爭』忠南大学校百濟研究所
- 李正鎬 2014 「新安 배널리古墳의 對外交流相과 年代觀—新安 배널리古墳의 年代와 築造背景을 中心으로」『古墳을 통해 본 湖南地域의 對外交流와 年代觀』国立羅州文化財研究所
- 林永珍 2000 「榮山江流域 石室封土墳의 性格」『榮山江流域의 古代社會의 새로운 照明』歴史文化学会・木浦大学校博物館
- 林永珍 2015 「韓國 墳周土器의 發生과 拡散 背景」『湖南考古學報』49 湖南考古学会
- 林永珍 2017 「全南 海岸島嶼地域의 倭系古墳과 倭五王의 中国遣使」『百濟文化』56 公州大学校百濟文化研究所
- 崔盛洛・金성미 2012 「円筒形土器의 研究現況과 課題」『湖南考古學報』42 湖南考古学会
- 河承哲 2012 「土器와 墓制로 본 古代 韓日交流」『아시아의 古代 文物交流』(中央文化財研究院編) 書景文化社 (日本語)
- 白石太一郎 2003 「二つの古代日韓交渉ルート」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会
- 鈴木一有 2007 「鉄鍬と甲冑からみた日韓古墳の並行関係」『韓日 三国・古墳時代の 年代觀 (Ⅱ)』韓國国立釜山大学校博物館・日本国立歴史民俗博物館
- 鈴木一有 2012 「清州新鳳洞古墳群の鉄器にみる被葬者集団」『百濟學報』8 百濟学会
- 田中良之 1995 「上ノ原横血墓群被葬者の親族関係」『古墳時代親族構造の研究—一人骨が語る古代社会』柏書房
- 松木武彦 2005 「日本列島の武力抗争と古代国家形成」『国家形成の比較研究』学生社
- 柳沢一男 2005 「百濟地域で発見された横穴墓とその背景」『東アジアの古代文化』125

插图出典

(いずれも一部改変)

図1：国立羅州文化財研究所 2014 『高興野幕古墳』

図1：金洛中 2008

図3～5：金洛中 2009

図6：金洛中 2012b

(全北大学校考古文化人類学科，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付，2018年10月1日審査終了)

The Yeongsan River Basin, Baekje and Wa, from the Perspective of the Kofun

KIM Nakjung

In the southwestern Korean Peninsula, some tombs were built based on the burial practices of Yamato in the fifth and sixth centuries. While recent studies are elucidating the background of these Japanese-style tombs, this article broadly examines the background of Japanese-style tombs built in the southern and western coastal areas of the Korean Peninsula in the early fifth century and keyhole tombs built in the Yeongsan River Basin in the late fifth and early sixth centuries.

Japanese-style tombs built in the southern and western coastal areas of the Korean Peninsula in the early fifth century were characterized by their nearness to the sea and their burial practices informed by those of small and medium-sized tombs in the northern Kyūshū region. These characteristics imply that the occupants of Japanese-style tombs had not assimilated into the local culture and were buried as foreigners. They seem to have been Japanese immigrants who played a substantial role in negotiations between Yamato and Baekje or other kingdoms in the Yeongsan River Basin. Moreover, the diversity in grave goods unearthed from local-style tombs in the southern and western coastal areas indicates the existence of local clans thriving with marine trades. The active engagement of such local clans based in major hubs along trade routes seems to have strengthened diplomatic relations between Yamato and Baekje or other kingdoms in the Yeongsan River Basin.

Keyhole tombs and local-style burial mounds built in the Yeongsan River Basin in the late fifth and early sixth centuries have similarities and differences in their burial practices. Although most previous studies suggested that they had been exclusive or opposed to each other, the fact that all of the clans that built these tumuli participated in a regional network of various trade routes and accepted new burial practices from Yamato and Baekje implies that these two styles of tumuli coexisted without excluding each other. From the perspective of local clans themselves, the selection between keyhole tombs and local-style burial mounds was a mere result of their decisions on what new burial practices to adopt and what relations to build with the central government of Baekje and Japanese immigrants.

In this sense, Japanese-style tombs in the Yeongsan River Basin are principally attributed to chiefs of local clans who had close relationships with Baekje and Yamato. Given that these local clans interacted so actively with Baekje and Yamato and that some of immigrants may have settled in the

basin, it is also worth considering the possibility that some of the chiefs interred in Japanese-style tombs originally came from Baekje or Yamato.

Key words: Yeongsan River Basin, keyhole tomb, Japanese-style tomb, immigrant, Kofun period